

健やかな体

研究課題

健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方

1 趣旨

社会環境・生活環境の変化は、子どもの心身への影響も大きく、体力・運動能力の低下をはじめ、ストレスや肥満傾向の増加、生活習慣病への危険性の高まりなど、様々な健康問題を引き起こしている。また、運動への関心や意欲の低下、さらに、運動する子どもとしない子どもとの二極化が進んでおり、体力の低下傾向や生活習慣病などが問題となっている。こうした状況の中で、子ども一人一人に運動や健康・安全の大切さへの意識を高め、自らの健康を適切に管理し、改善する能力を培うことは重要である。また、子どもが学んだことを、実社会・実生活に生かせるように家庭・地域との連携を強化し、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育み、運動のできる環境も含め健康で安全な生活を送ることができるような教育課程の編成・実施などが求められる。

これらを踏まえ、学校での教育活動とともに、家庭や地域の役割を明確にし、学校・家庭・地域が密接に連携・協働することが必要と考える。本分科会では、これからの時代を生きる子どもが、心身ともに健やかな成長を目指す健康教育を推進するためのカリキュラム・マネジメントについての具体的方策と成果を明らかにする。

2 研究発表とグループ協議

研究発表 1

〔視点①〕

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する教育活動の推進

〔発表題〕

地域の特性を生かした健やかな体を育む教育活動の推進と校長の果たす役割

青森県 階上町立小舟渡小学校 大手 宏秀

〔発表要旨〕

三戸郡内では、過疎化・少子化が急速に進み、学校再編による学区の広域化のため、バス・自家用車での通学が増え、日常的な運動機会の減少による肥満傾向の子どもの増加や、それに伴う運動への関心・意欲の低下が危惧されている。

郡内の子どもの実態把握のため、「運動に関する積極性」「登校方法」「体育の授業への参加態度」「体育授業以外にスポーツをしている時間」「肥満傾向の状況」の観点から調査した。その結果、約90%の子どもが「運動が好き」と答えている反面、バスや自家用車での通学者に運動嫌いがやや多かった。また、20分以上の徒歩通学者には、肥満傾向の出現率



が半分であった。調査結果を分析・考察し、以下の取組を行ってきた。

- (1) 学校教育全体で体育を日常化する
 - ① 週3回の全校体育、週2回の上下学年体育の実施
 - ② 様々な種目を行う週4回のスポーツクラブの実施
- (2) 体育の授業を工夫改善する
 - ① 体育担当教師や中学校体育担当教師とのTTの実施
- (3) 家庭や地域と連携して、多様な運動に親しませる
 - ① 継続的かつ多様なスポーツの機会を提供する場として週2回の地域スポーツクラブの実施
- (4) 地域の特性を生かして運動に親しませる
 - ① 積雪が多い地域の特性を生かした、地域の指導者による全校スキー学習の実施

〔グループ協議の概要〕

(1) 授業改善（人的環境）について

校長が指導体制を構築し、体育専科教員の活用や熱意ある教員の育成、中学校体育教師や外部指導者などとのTTにより、授業を改善する取組は有用である。

(2) 環境整備について

校長の役割は環境を整えることである。選択と集中が鍵となる。家に帰ると遊ばない、遊び方を知らないという実態から、学校で遊ぶ機会を設けて遊び方を教えたり、日課表を工夫し、休み時間を確保したりすることは有効である。また、学校生活全般で望ましい運動習慣を形成するため、縦割活動や業間遊びの導入、小中一貫による体力手帳の導入の取組例が報告された。さらに、スケートリンクや土俵の整備といった物的環境の充実例も挙げられた。

校長自らが目標を掲げ、率先して体力づくりに取り組んだり、保護者や地域と連携するため、適切な情報発信により説明責任を果たし、コミュニティ・スクールなどの活用による協力体制を構築したりすることも重要である。

研究発表 2

〔視点②〕

生涯を通じて自他の健康課題に適切に対応する教育活動の推進

〔発表題〕

生涯を通じて自他の健康課題に適切に対応する教育活動の推進と校長の指導性

北海道 厚沢部町立鶺小学校 本谷 弘之

〔発表要旨〕

子どもの健康や体力は学力とともに子どもの生きる力の根底となるものであり、現代の子どもの重要な課題である。檜山管内は、学力的にも体力的にも全道や全国と比較し上位にある。各町及び各校での取組が組織的に行われているといえる。一方、家庭との連携や関わりを大切にしながらも、家庭への啓発を根気強く行わなければならない現実もある。

檜山校長会小学校部会では、平成29年度から平成31年度まで「健やかな体」に関する実践研究を進めるに当たり、学校での教育活動とともに、家庭や地域の役割を明確にし連携して取り組むことが大切と考えた。以下の3点を研究の視点とし、3年計画のPDCAサイクルを意識して実践を行った。

(1) 体力・運動能力の向上

- ① 体育授業以外の、多様な運動動作を重視した、運動遊び、複合活動の取組（始業前、休み時間の鬼ごっこやジャンケンリレー、数値目標を設定したマラソンや縄跳び）
- ② 全学年で実施した新体力テストの効果的活用
- ③ 児童会役員や専門委員会による楽しみながら体を動かす活動の推進

(2) 生活習慣の向上

- ① 生活リズムチェックシート、生活点検カードなどの活用による生活リズムの定着
- ② ゲーム機、情報機器の利用についての調査・分析に基づく啓発
- ③ 児童会・専門委員会による健康づくり活動の推進

(3) 健康教育の充実

- ① 栄養教諭などの食育の推進（給食指導、食育指導）
- ② 養護教諭などの病予予防の推進（咳エチケット、歯磨き指導など）
- ③ フッ化物洗口の実施
- ④ 食物アレルギー対応
- ⑤ 心の健康充実（スクールカウンセラー、ソーシャルスキルトレーニング）

〔グループ協議の概要〕

(1) 様々な「連」の重要性について

校長の指導性という点から、「連携」「連継」（幼小中高や外部の専門機関と）「連帯」（同じ校種で町全体で）「連絡」（校内における教職員とのスムーズな対話による共通理解）「連休」（教職員が休むことのできる環境づくり）「連継」（人が変わっても取組が継続されるようPTAや地域を巻き込んで）といった6つの「連」が重要と考える。

(2) 保護者の意識改革について

望ましい生活習慣の育成を図るためには、保護者の意識

改革を図ることが重要となる。学校として、養護教諭が行う取組の後押しをする、今ある取組の価値の見直しを図り、教師間の情報を密にし、実態を把握するなどのことが大切と考える。幼保小中における保護者の家庭教育における学びの連続も欠かせない。また、PTAが主導し、情報機器や生活習慣についてのルール作りを進め、親同士のつながりを深めることも有効である。さらに、行政（福祉関係やSSW）や地域（町内会、民生委員）が家庭を見守る仕組みづくりを充実させる必要がある。これらを校長がコーディネートすることが肝要となる。

3 まとめ

視点①では、体力・運動調査のクロス集計による子どもの健康課題の把握と特徴的な実践事例の成果・課題から校長の果たす役割と指導性についての提言があった。視点②では、檜山の各校の実態と効果的な取組の方策・実践と校長の指導性についての提言があった。グループ協議を通し、運動習慣と生活習慣は一体であるという考えも示された。以下に、主なものを成果と課題として記す。

〔成果〕

- (1) 教育活動を円滑に実施・改善する上で、校長が指導者や関係者へ直接働きかけることは効果的である。関係団体との連携など、開かれた取組は、生涯にわたるスポーツライフへの発展が期待できる。また、子どものニーズや変容の的確な把握は、体力向上や健康的な生活習慣の獲得につながる。
- (2) 朝・業間・放課後などの体力向上の取組が、子どもの意欲、能力の向上に結び付いている。専門性の高い取組や校種を越えた取組も子どもの興味・関心を高めている。

〔課題〕

- (1) 保護者や指導者の時間的・経済的負担を考慮した、児童スポーツ活動の在り方を考えていくことが必要である。関係団体や地域との連携を更に進め、スポーツに触れる機会、楽しさや喜びを味わったりできる環境の整備が必要である。また、教科体育などで生涯スポーツへとつなげる道筋を明らかにしていく必要がある。
- (2) 児童の自己管理につながる「生活リズムチェックシート」を効果的に活用するには、校種を越えた連続性が重要となる。学校全体で個人記録シートを整備するなど、組織的な仕組みづくりがこれからの課題といえる。また、スクールバスの利用が増え、「歩く」などの日常運動を意図的に設定する必要がある。

